【月刊】
キャッチピース

154
通巻 231 号
08/05/20

「住民投票でゲンキ」とパレードしたが…（08/5/11「原子力空母の横須賀母港問題を考える市民の会」提供）

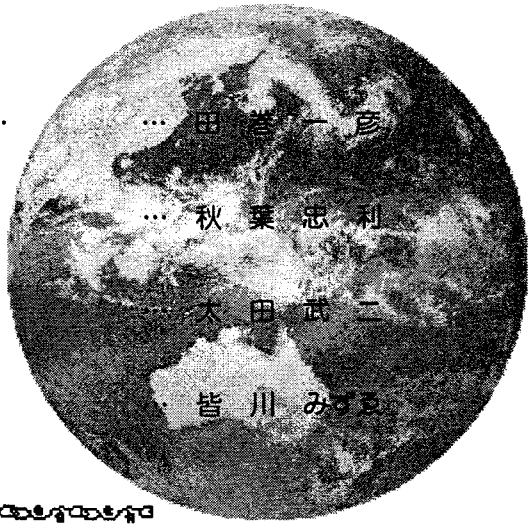
この号の内容

●横須賀・市議会　住民投票否決、だが… …田巻一彦

●核兵器のない平和な世界を目指して …秋葉忠利
＜2月10日藤野町での講演から＞

●オキナワから　トウキョウから …大田武二

●オキナワの二ヶ月 …皆川みずき



編集発行人●脱軍備ネットワーク・キャッチピース
●維持会員（月額）個人1口1,000円　団体1口2,000円　●参加会員（月額）個人1口500円　団体1口1,000円
●通信会員（年額）1口3,000円　（会費には本誌購読料が含まれます）

横須賀：市議会、住民投票条例を否決。だが、

横須賀に吹きはじめた ◇◇◇◇◇◇ 市民の風の勢いを止めることはできない。

（「成功させる会」の声明）

田巻一彦 キャッチピース運営委員

またも大差で否決された条例案

横須賀市議本会議は5月16日、市民の署名（有効署名数48,661筆）を添えて直接請求されていた「原子力空母の母港化の是非を問う」住民投票条例案を、賛成8、反対33、棄権1で否決した。前回（06年2月請求）を1万筆以上うわまわる市民の声に、またしても市長と議会は背を向けたのである。

直接請求運動を推進した「原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」は、すぐにこれに抗議するとともに、本日を新たな始まりとして、運動をさらに広げていきたいと決意するものである。「本日を新たな始まりとして、運動をさらに広げていきたいと決意する」との声明を発した（囲み1）。

市長は、前回と同じく、住民投票実施には否定的な姿勢をとりつづけた。市長の論理は2点に要約できる。すなわち、第1に、安全保障問題は国の専権事項であり、住民投票になじまない。第2には、民意は市議会議員選挙などを通してすでに議会に反映されているので、改めて問う必要はないというものである。しかし、住民投票が示そうとしたものは、市民の意思であり、浚渫工事の差し止めという市の「専権事項」に対する権限の行使である。また議会は過去2度にわたって「原子力空母の母港反対」の意見書を採択しており、06年6月の市長の母港容認表明後もその意見書は撤回されていないことも忘れてはならない。つまり公式には市長と議会の間には見解の「ねじれ」が存在しており、住民投票はそれを修正する手段でもあった。

このような経過を考えれば、市長と議会が一体となった条例案否決は、民主主義の精神に反する行為であるとの批判を決して免れるものではない。

意見書採択は大きな手がかり

住民投票条例を否決した市議会本会議は、「米空母の交代配備に伴う諸問題に対し横須賀市民の安全・安心を求める意見書」を採択した（囲み2）。「意見書」は、条例直接請求を「多数の市民が危惧していることの証左」であるとして「署名の重みは市議会として真摯に受けとめ」、次の4項目を国に求めた。

1　原子力空母の安全性確保及び防災体制の強化
2　米兵による犯罪の再発防止に向けた実効性ある対策の確立
3　事故・事件発生時における迅速な情報公開及び事後における報告の徹底
4　日米地位協定の早期改定

「署名の重みを真摯に受け止め」た議会が、なぜその署名が求めた住民投票条例を否決し去り、市民に民意を表明する機会を奪ったのかという大きな疑問は残る。しかし、8月19日に予定されているジョージ・ワシントンの配備まで100日を切った時点でなお、議会が原子力空母の母港に、4つの留保条件を付け諸手を上げて賛成していないことを表明した意義は過少評価するべきではないだろう。

「成功させる会」の声明が言うとおり、5月16日は新たな始まりである。市民の巻き起こした風は、原子力空母の海外母港という前例のない、無謀ともよぶべき安全保障政策の足下を揺るがしつづけるだろう。

原子力空母配備及び安全性を問う住民投票条例案の横須賀市議会否決に対する声明

2008年5月16日
原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会

本日、横須賀市議会は本会議で、原子力空母の配備及び安全性を問う住民投票条例案を、賛成8名、反対33名、棄権1名により否決し た。原子力空母の配備をこの8月に控え、前回よりも1万以上も増えた約5万の署名による市民の願いに対して、市長は正面から受け止めようとせず、市議会の多数の議員もこれに同調して、それを拒絶したことは、甚だ遺憾であると言わざるをえない。

しかし、この5万の署名に託された市民の声を無視できなかったからこそ、市議会は安全の強化を求める意見書を採択した。この2回にわたる住民投票を求める署名運動で原子力空母の配備につき、きちんと市民の声を聞き、その不安を受け止めてほしい、自分たちの町のことは自分たちで決めたいという、市民の輪が大きく広がった。そして市議会の否決も、この横須賀に吹きはじめた市民の風の勢いを止めることはできない。

私たちは、原子力空母の配備によって始まろうとしている市民の安全の危機に対して、本日を新たな始まりとして、運動をさらに広げていきたいと決意するものである。

平成20年　意見書案第3号

米空母の交代配備に伴う諸問題に対し横須賀市民の安全・安心を求める意見書の提出について

本市議会は平成16年及び17年に空母キティ・ホークの後継艦に通常型空母の配備を求める意見書を、また平成17年には原子力空母の配備に反対する決議を、それぞれ全会一致をもって可決した。この問題については、横須賀市長も幾度となく通常艦配備要請を行ったところである。しかしながら、平成18年6月に市長は、極東の安全を考える上で、空母の存在は重要であり、後継艦として通常型空母配備の可能性がゼロになったことが判明したことから、やむなく原子力空母の受け入れを容認する旨の表明を行った。

これに対し、平成19年2月には原子力空母の配備の是非を問うため、さらに本年5月には原子力空母 の配備とその安全性を問うため、市民多数の署名を集めた直接請求による住民投票条例案がそれぞれ提出された。これは原子力空母の配備に対し多数の市民が危惧していることの証左として、署名の重みは市議会として真摯に受けとめるものである。

唯一の被爆国である日本国民にとって、核に関する対応は常に大きな問題となる。中でも・横須賀市民は従前から米原子力潜水艦の放射能漏れ疑惑などから、核の安全性に対し強く不安を抱いており、その不安が解消されないまま、今回原 子力空母が配備されることに一層不安を募らせたことが、今回の直接請求の一因であると言える。

さらに、市民は原子力艦船のみならず、米軍の規律に対しても不安を抱いている。米海軍に所属する兵士が、市内において起こした事件は、平成18年1月の女性会社員の強盗殺害事件、平成19年7月の2女性に対する刺傷事件、本年3月のタクシー運転手刺殺事件など多数に及び、その都度市民を恐怖に陥れた。それら事件の発生のたびに米軍は謝罪し、再発防止のための綱紀粛正を約束したが、日本を安全保障条約に基づき守る立場の米軍が、罪のない日本国民に危害を加えるという本末転倒とも言える事態に、市民の米軍に対する不信感はますます増大している。

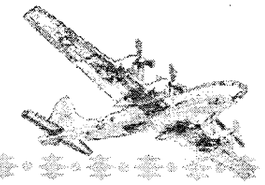
米軍は、これらの事件に対し、日米地位協定の運用で最大限の協力体制をとっているが、もはや市民の安全な暮らしを守るためには運用改善ではなく、一刻も早い同協定の改定が必要である。

よって、国におかれては、市民の安全・安心確保のため、次の事項について米政府と早急に協議されるよう強く要望する。

1　原子力空母の安全性確保及び防災体制の強化
2　米兵による犯罪の再発防止に向けた実効性ある対策の確立
3　事故・事件発生時における迅速な情報公開及び事後における報告の徹底
4　日米地位協定の早期改定

以上、地方自治法第99条の規定により意見書を提出する。
平成20年5月16日
提出先　衆議院議長、参議院議長、内閣総理大臣、外務大臣、防衛大臣

「平和都市広島と藤野・相模原市を結ぶ」実行委員会
「秋葉忠利広島市長を招いて」講演より抜粋



核兵器のない平和な世界を目指して

ー21世紀は市民の力で問題を解決できる時代ー

広島市長　秋　葉　忠　利

その2

被爆体験継承の問題

被爆体験を忘れてはいけない、被爆体験を記憶してずっと未来の世代にも伝えていかなくてはいけないということがひとつ私たちに与えられた責任だと思っています。被爆体験継承、なかでも一番大事なもののひとつが、被爆者のメッセージです。

ところで、被爆者のメッセージを未来に伝えるためにはいろいろな問題があります。

その一番大きな問題が「時間」です。

被爆者の平均年齢は現在七四歳です。広島に行って資料館を見ていただいたり、被爆者の話を聞くということはとても重要ですし、被爆の体験談に感動しない人はまずいないと思いますけど、残念ながら、七四歳を越えて、今まで証言してきた被爆者が証言できなくなった、あるいはその証言者のグループをつくって互いにサポートし合ってきたそのグループが解散したりということも起きています。

そうすると、私達としては被爆者の記憶を次の世代にもちゃんと伝えていかなければならない、そしてさらにつぎの世代にも伝えていかなければならないのですが、被爆者の証言にだけ頼ってその被爆者のメッセージを伝えていくことを考えていたのでは、どこかで記憶が途切れてしまう。記憶が途切れてしまうと、先ほど申し上げたように、そこで歴史が繰り返す。核兵器がまた使われるようになるでしょう。それは人類の滅亡につながる。

ですから、新しい方向で被爆者のメッセージ、被爆体験の実相を伝える努力をしなくてはいけない時期に来ている。

公演中の秋葉忠利広島市長

で、いろいろなことを考えているんですけど、その一つが、被爆体験記の朗読です。これは皆さんにもぜひどこかで ー 被爆体験記にはいろいろありますし、図書館にはどの図書館にもだいたいあると思いますけど ー どれでもいいと思いますが、被爆体験記を子ども達に読むということをやっていただきたい。

被爆者の側に立つ

子ども達に読ませるのでもいいのですが、「読む」という体験で、それをさらに子ども達に読んでもらう、声を出して朗読してもらうということで、被爆者との距離が縮まります。

どういうことかと申しますと、われわれが被爆体験記を読んでいるときは、向こう側に書いた被爆者がいて、読者として（こちら側で）読んでいるわけです。

ですから体験はしていても、被爆体験記を書いた被爆者との間には距離がある。ところが、自分が体験記を読んでこちら側に聞き手がいると、読んでいる私は被爆者の側に立てるんですね。ですから読むことによって、朗読して誰かに聴いてもらうことによって、一歩被爆者に近づくことになります。その近づく距離というのが、とても大事だと思います。

体験できれば、今度はその次の行動につながるんですけど、そこでぜひ被爆体験を読むということをやっていただきたい。

詩歌、文学、演劇、映画、音楽、美術といろいろなやりかたがありますが、要するに情緒に訴える手段で、例えば、皆さん自身が核兵器あるいは原爆について、被爆者についていろいろ感じたことを表現していく、その表現を通してその感動をさらに次の世代に伝えていくということが、とても大事だと私は思います。

「生ましめんかな」は栗原禎子さんが書いた詩ですが、この詩を読んで、私自身が気づいたことは、広島のもっているメッセージがすべて絶望的なものばかりではなくて、あの絶望的な体験のなかから未来を生む力がそのなかに備わっている、ということです。

壊れたビルディングの
地下室の夜であった
原子爆弾の負傷者達は
ローソク一本のない地下室を
うずめて、いっぱいであった
生ぐさい血の匂い、死臭
汗くさい人いきれ
その中から
不思議な声が聞こえてきた
「赤ん坊が生まれる」というのだ
この地獄の底のような地下室で
今、若い女が
産気づいているのだ
マッチ一本ない暗がりで
どうしたらいいののだろう
人々は自分の痛みを忘れて
気づかった
と、そのとき
「私が産婆です
私が生ませましょう」
と言ったのは
さっきまでうめいていた重傷者だ
かくて暗がりの地獄の底で
新しい生命が生まれた
かくてあかつきを待たずに
産婆は血まみれのまま
死んだ
生ましめんかな
生ましめんかな
おのが命捨つとも

このほかにも峠三吉、原民喜、大田洋子、大江健三郎…、いろいろな人のいろいろな作品があります。

平和の循環

また、未来の世代に被爆の実相と被爆者のメッセージを伝えていくために、折り鶴を使った「平和の循環」をつくりたいと思っています。

被爆者のみなさんが証言することでメッセージが直接伝わっていきましたが、そのメッセージを世界の子ども達が今度は主体になって「平和の循環」をつくることが可能だと思っています。

皆さんは佐々木禎子さんの話はご存知だと思います。彼女は、中学生になったときに白血病が発病する。病院に入院して「助からない」と言われるんですけど、自分で千羽鶴を折ると自分の願いが叶うと聞いて、一所懸命鶴を折りました。千羽以上も折りましたが、命は助からなかった。

そのことをずっと、禎子さんを見つめてきた同級生達がその意志を継いで、「原爆の子」の銅像をつくりました。それは、佐々木禎子さんのような経験を子ども達に二度とさせてはいけないという思いをその「原爆の子の像」に托したんですけども、その話を今、世界中の子ども達がいろいろな言語で読んで、あるいはアニメーションビデオで見て知っています。

その子ども達が鶴を折って、毎年毎年広島には十トンもの折り鶴が届けられます。一千万羽の折り鶴が毎年毎年広島に届きます。私が市長になりますまでは、折り鶴は三ヶ月ほど置いた後、燃やしていました。露にうたれ雨に濡れて腐ってくるという理由でした。

が、これらの鶴は禎子さんのようなことを二度と起こしてはいけない、平和が大事なんだ、その願いをこめて折ってくれたものです。ですから、その鶴を保存して、これからメッセージを出したいんんですけど、その折ってくれた子ども達に「あなたの折り鶴は大事にしていますよ、あなたの平和のメッセージはきちんとここで保存をして、それを世界中の人が見られるように… ― しかも三ヶ月分だけでもものすごいインパクトがあります。一年分となると、この部屋いっぱいくらいの折り鶴になります。様々な折り鶴、なかにはとてもきれいなデザインを折り鶴でつくっているものもありますし、子ども達のメッセージもあります。

その折り鶴を保存して、子ども達に「あなたが大人になったときに、あなたが子どものときに平和を願って折った鶴をあなたの子ども連れて一緒に見に来てください」、その人が例えばアメリカから来た人であっても、どこから来た人でも、来た人には自動的に「これは〇年〇月〇日にあなたが送ってくれた折り鶴ですよ」と見せてあげたいと思っています。で、親子でまた鶴を折って、それを托していく、今度はそのときに折り鶴を折った子どもが大人になったら、また自分の子どもを連れて広島に戻って来てほしい。

そういう「平和の循環」をつくることで、子ども達が自分達で鶴を折ってつくった循環で、広島の意味や被爆者のメッセージを自然に身につけていくということをぜひ実現したいと思っています。それも新しい試みのひとつです。

（次号につづく）

【註】

栗原　貞子
1913年、広島市可部町（現安佐北区）の農家に生まれる。昭和から平成にかけて原爆の非人間性を告発し続けた反核・反戦詩人。広島県の可部（かべ）高女卒。第2次世界大戦中「人間の尊厳」などの反戦詩でデビュー。45年広島で被爆した後、夫とともに「中国文化連盟」を結成、46年機関誌「中国文化」を創刊、原爆特集号に詩「生ましめん哉（かな）」を発表、これが代表作となる。米占領下の原爆について自由に語ることができない時代は、名前を隠し、原爆を告発する作品を次々と発表、「にんげんをかえせ」とうたった峠三吉とともに、原爆詩人として海外にも知られる。原水爆禁止運動や平和・護憲運動にもとりくみ、『私は広島を証言する』『ヒロシマ・未来風景』などを刊行、05年に死去するまで70年以上の創作活動で詠んだ作品は詩、短歌など300編とも500編ともいわれている。

原民喜（はら・たみき）
明治1905年、広島県広島市幟町一六二に生まれる。33年、同人雑誌「ヘリコーン」に参加し、短編小説を発表。35年、処女作品集「焔」を自費出版。36年頃より、雑誌「三田文学」を舞台に短編小説を多く発表し始める。45年、郷里の広島の兄の家に疎開。同年8月、原爆投下にあう。この体験は「夏の花」（45年）、「鎮魂歌」（49年）などの作品を生んだ。特に「夏の花」は、原爆を描いた数々の文学作品の中で、抜きん出た評価を得ている。50年、広島のペンクラブ主催の平和講演会に参加。51年、吉祥寺西荻窪にて鉄道自殺。享年45歳。代表作は「夏の花」、「廃墟から」、「壊滅の序曲」、「鎮魂歌」、「原爆小景」など。

大田洋子
1903年、広島県山県郡原村で生まれる。広島市白島九軒町の妹宅に疎開中、8月6日広島九軒町の妹宅で原子爆弾に遭い、かすり傷を負う。神田橋下手の大田川原で3日間野宿した後、佐伯郡玖島に逃れ、知人宅に滞在。11月、被爆の惨状を記録したルポルタージュ「屍の街」を脱稿。46年、「屍の街」を中央公論社に送ったが、アメリカ占領軍の検閲を受けなければならないため発行できなかった。47年「屍の街」を執筆したことにつき佐伯郡友和村河津の江島宅でアメリカ占領軍の調べを受ける。1948年、「屍の街」を1部削除して中央公論社より出版。51年、東京フォーラムの会主催「原爆の教え」講演会に「原爆体験者として私の怒りは今もなお深い」を講演。「人間襤褸」で第4回女流文学者賞を受賞。56年、NHK第1放送で「流離の岸」がラジオドラマ化され放送。58年、「なぜその女は流転するか」の取材のため福島県耶麻郡猪苗代町に旅行中、死去。

峠三吉
1917年、大阪府豊能郡岡町（現・豊中市）に生まれる。46年、童話「虹」を書き、小説「遠雷」を発表。その後、少年少女雑誌「銀の鈴」に「百足競争」が掲載される。童話「ドッジボール」、小説「鏡占い」などを書く。48年、「夕刊ひろしま」の「生活の詩」欄の選者となる。瀬戸内海文庫に 迎えられ、雑誌「ひろしま」の編集長となる。廣島詩人協会の結成に参加、「地核」の編集を担当。49年、文学サークル「われらの詩の会」を結成し代表となる。50年、深川宗俊とともに「反戦詩歌人」第1集、2集を発行。51年、孔版印刷「原爆詩集」（四国五郎装丁・500部）を発行。52年「原爆詩集」（青木文庫）出版。青木書店の依頼により原爆の詩編纂委員会を結成し、詩華集「原子雲の下より」を出版。「日本ヒューマニズム詩集」第1集の読者投票で「墓標」が第1位 となる。53年、死亡。63年、詩碑建設委員会（深川宗俊委員長）により「ちちをかえせ、ははをかえせ」の詩碑、平和公園に建立される。

嘉手納基地の戦闘機 FA18 ホーネット（リムピース提供）

沖縄平和ツアーをコーディネートした

以前自己紹介的に書いたかもしれませんが、私は小学校１年生の秋、沖縄那覇の城岳小学校から東京品川の旗の台小学校に転向して来ました。その前は、３歳の時に生まれた宮古島から那覇に出てきていたので、３年、３年の都合６年間しか当時の琉球政府下での生活を経験していませんでした。

その後、中学生から大学卒業２年後まで東横線菊名駅から 10 分ほどの所に移り、そして、結婚と同時に同じ東横線多摩川園前駅側の４畳半のアパートで、２年間親子３人の生活。それから今の千葉県佐倉市上志津原に移り住んで早いもので32年間が過ぎました。この間、町内会の役員、子ども会、原の自然に親しむ会、人権ネット、市民ネットやエスニックコンサートなどと、それなりに佐倉市民としての権利と義務を果たしていた時期もありました。

しかし、正直に言って子ども達が成人した後は、仕事が変わったこともあり、ここ 10 年以上いわゆる佐倉都民の生活。殆んど沖縄と組合の活動で朝早く自宅を出て夜遅く帰宅という生活が続いてきました。

ところが、昨年の夏から秋にかけて佐倉市民ネットの沖縄学習会や千葉県ネットの沖縄平和ツアーの事前学習などに呼ばれたお陰で、今回４月 13 日から 16 日の佐倉市民ネットワークの沖縄平和ツアーのコーディネイター役を仰せつかったのです。

佐倉市から私も入れて 19 人、長年千葉県の生活クラブの職員だった沖縄人（うちなんちゅ）が一人沖縄で合流して総勢 20 名のツアーについて報告させていただきたいと思います。私にとってもツアーの企画責任者として沖縄に帰ったのは 12 年ぶりのこと。いつもはマイクロバスの運転手と案内係の兼任だったのが、今回は観光マイクロバスの運転手付きということで、想えば想うほど恵まれたツアーでした。

ツアーでのすばらしい出会い

それは、奇跡とも思えるほどすばらしい人との出会いが毎日あったからです。まず空港について最初にあった沖縄人との出会いから始まりました。というのはその観光マイクロバスの運転手さんが、白保の新石垣空港に反対する運動の渦中にいた人で、私の同志たちと深いつながりを持った人だったことです。沖縄には「いちゃりばちょうでー（行き逢えば兄弟）」という言葉があります。初めて出会う人に対して兄弟と同じように懐かしい感じを持って親しく付き合いなさいという昔からの格言です。その兄弟との再会のような彼が、初日だけの予定を変更して３日間付き合い要所要所で平和ガイドの役も果たしてくれたのです。

その後、初日の夕方は、泡瀬干潟を守る運動に携わってきた小橋川さん。２日目は、伊波洋一宜野湾市長、佐喜真美術館の館長とお連れ合い、そして読谷村では親戚の葬儀の時間を割いて案内してくれた知花昌一さん。３日目は、午前中から夕方にかけて東村高江と辺野古で座り込みを続けている方たちの阻止行動に参加し、その途中で元佐倉市民ネットの仲間で 10 年近く前に芭蕉布で有名なふるさとの喜如嘉に戻った方のお店にも寄ることが出来たのです。

そして、最終日の朝には那覇市議の平良識子さん。そうした皆さんが、貴重な時間を割いて沖縄の歴史、現実、そして未来について沢山の想いを伝えてくれたのです。

ちょうど 63 年前は、読谷、嘉手納から無血上陸した米海兵隊と大本営からの作戦指示で持久作戦を変更した第 32 軍との間で「ありったけの地獄を集めた戦闘」と米軍が恐れた闘いが行われていた時期でした。

外間さんの本との出会い

ツアー最終日の自由時間に県立美術館に入った時、当時 20 歳でその戦闘に参加し負傷しながらも生き延びた外間守善さんの書いた「私の沖縄戦記－前田高地・60 年目の証言」と出会いました。外間さんは、「おもろそうし」「南島歌謡」などの他多数の著作があり、沖縄学研究の第一人者としては知っていたのですが、そうした戦争体験を生き抜いていた方だとは全く知らなかっただけに、その本の内容は強烈でした。

高江のノグチゲラ
(08/5/18、「やんばる東村 高江の現状」より)

沖縄滞在中から読み始め、千葉に戻ってきてからも読み続けて「艦砲ぬ喰えーぬくさー（食い残し）」という生き残った人間の責任として戦争の地獄だけでなく命の奇跡と平和の大事さを全身全霊で表現していることに感動しました。特にその前田高地の一角には４年前に亡くなった私の母のお墓があり、そこから嘉数台地、普天間、嘉手納基地、読谷村も含めてその激戦地が一望できるということで、お墓参りの度にそうした想いを感じていただけに、その本に出会えたことの意味を噛みしめています。

オキナワでの人間尊厳破壊から想う

こうした感謝と感動のツアーの中で感じたことは、1879 年の琉球処分以来続く戦争と差別、軍事基地の重圧という歴史の中で、今後も日米両政府による軍事植民地として政治、経済、自然、そして沖縄人の人間性が破壊され続けようとしている厳しさでした。それは、泡瀬の干潟を守ろうとする意志よりも埋め立て工事の開発が生み出す利権に群がる意志が多数となり、辺野古の海を守る意志よりも漁業に絶望し１日の日当５万円ほどで基地建設の為に船を出す漁人（うみんちゅう）たちに象徴されていました。まさに開発独裁の暴力による自然と人間の尊厳破壊そのものでした。

これは戦後のアジア太平洋地域に日本資本が再侵略していく過程で、いわゆる戦後賠償から政府開発援助=ODA という形を装って強行されてきた開発独裁の暴力と同じだと思います。それは、沖縄でもそうであるように、民衆の生きるためのギリギリの抵抗とのせめぎ合いを生むことになります。その抵抗が当初は非暴力であれ、弾圧は無慈悲に暴力的に襲い掛かります。その究極の暴力装置として存在し続けてきたのが、戦後から今日まで沖縄に居座り続けてきた米軍であり、今の日本軍、自衛隊である以上、否応無しに沖縄の先にはアジア太平洋地域で軍事的な抑圧を受けている御万人（うまんちゅ＝民衆）がいるということです。

その日米安全保障条約という軍事同盟が、いつの間にか「アジア太平洋の平和と安定に貢献している」という評価が常識のように語られているのは、何とも許せないことです。その要石としての沖縄は、戦後 63 年間一貫して変わっていないし、未来永劫「不沈空母」としか見ていないのが日米両政府です。戦後の沖縄

やんばるのバナナ
(08/4/18、「北限のジュゴンを見守る会」より)

は、朝鮮、ベトナム、中東湾岸、アフガン、イラク戦争、そして反政府運動家を虐殺し続けるインドネシア、フィリピンの御万人にとって悪魔の島＝米軍の出撃基地に他ならなかったわけです。

それが今、2014年に向かって強行されている日米軍事再編であり、再び沖縄を前線基地として日本全体を戦争への道に引きずり込もうとしている中で私達の生き方、闘い方が厳しく見直されるべきだと思っています。というのは、この5月1日付け読売新聞が、「中台間の軍事緊張が高まっていた1958年8月中旬、当時の統合参謀本部議長は閣議で、まず中国福建省アモイ周辺に10~15キロトンの核爆弾を投下、それでも中国共産党軍が海上封鎖を解かないならば、上海などを攻撃すると説明。その場合、中国軍が沖縄や台湾に対する核報復に踏み切る危険性があることも指摘した。(以下略)最終的にはアイゼンハワーに認められることはなかったものの、中国本土への核攻撃計画は閣議で承認されていた。」とワシントンからの情報を報道したのです。つまり、金門島を確保するためには、沖縄・台湾への核報復を受けても仕方ないと統合参謀本部議長は考え、沖縄米軍基地からの核攻撃が閣議決定されたということです。

この情報は、有事の核持込という1972年の沖縄「返還」時の日米政府間の密約と合せて考えれば、決して過去のことではありません。未来の戦争がミサイルによる最終戦争になることが明らかであることと今回の読売情報はつながっていると思わざるを得ないのです。

評論家ではいけない

只、以上の読売新聞の情報を知らせてくれた「キーストーン」というメーリングリストに、投稿者の感想として「米軍基地がある限り、沖縄の置かれた状況は変わらないと思われるが、金(振興策)のために基地容認の知事(稲嶺・仲井真)を選んできた沖縄県民も、それは仕方のないことと考えているのだろうか?」と言うコメントがついていました。

こうした評論家的というか第三者的な批判には、正直言ってガックリと言う感じでした。蛇足以上のこの表現は、誰に向かって、何のために書かれたのでしょうか。

「沖縄県民も」「核報復を受けても」「仕方ないことと」考えているわけないでしょう。そもそも米軍の統合参謀本部議長の「仕方ない」と沖縄人を同列に評価すること自身あってはならないことです。

仲井真知事ですら、そうした意味で米軍基地の存在を容認しているわけではないし、自民党員も米軍基地の整理縮小、核兵器の持ち込み反対なのです。問題なのは、そうした軍事植民地として沖縄を抑圧し続けるために米国と裏取引をしてきたし、今後もそうしたいと公言している日本政府に代表される政治家、資本家などの支配層でしょう。勿論、ヒロヒト天皇こそがその先鞭を付けてくれたわけで、戦前から変わることのない天皇制国家としての日本総体を問い直し、変革をめざす多くの日本人(やまとんちゅ)の友人たちとの連帯共闘を強めるために何ができるか、何を表現するのかと言うことだろうと思います。

「昭和の日」にだまされない

というのは、いわゆるゴールデンウイークの一連の祝日が、今は昭和の日となっている29日のヒロヒト天皇の誕生日から始まっていることを、最近では殆んどの人が問題にしなくなっているという悲しい現実を変えなければならないと思うからです。

また、かつては沖縄デーといわれた28日にサンフランシスコ条約と日米安保が発効し、それによって沖縄が米軍占領下に置かれた一方で連合軍の占領からの独立を祝う国民的キャンペーンが華々しく行われたことを批判する人たちも殆んどいなくなっているからです。更に、その28日と29日の連続性が、憲法が施行された1947年の秋に、いわゆる天皇メッセージといわれる「米軍による琉球諸島の分断支配の継続」がマッカーサーへ届けられたことと深い関連があるからです。

又、戦時中の敗戦が決定的な1945年2月14日に近衛首相の終戦提案を拒否して、東京他大都市への連続大空襲、硫黄島、沖縄戦、そして広島、長崎への原爆投下まで時間稼ぎをして敗戦に至り、戦後の連合軍からも占領支配の道具として重用された天皇が、この憲法とも深く関わっているからです。だからこそ、平和憲法の第1章は天皇から始まっているのです。つまり、日米両支配層の戦前から戦後、そして今日に至る共同利益の追求という流れの中に憲法があり、だからこそ平和条項の9条と沖縄の米軍占領、日米安保が一つのコインの両面だと言えるのです。

9条世界会議の活況

そうした61回目の憲法記念日。護憲運動が、沖縄も含め全国各地で活況を呈する5月3日。最近紙面の内容が悪い朝日新聞でも、社説から解説記事、投稿など多彩な意見が満載でした。その中で、4日から6日まで千葉幕張メッセで開かれる9条世界会議に向けての広島を2月にスタートしたピースパレードの報告記事は効果ありでした。そして、感動的だったのが別刷版のBEに連載されている「日野原重明さんの96歳、私の証、あるがまま行く」のコラムでした。表題が「憲法改悪阻止に18歳の力を」。その冒頭に「きょう5月3日の憲法記念日は、今後の日本の歴史を作り上げていく上でいちばん重大な案件を議論するのに相応しい日だと思います。」と書き始め、途中で「私は若い純粋な気持ちを持つ18歳以上の青年達に、政府が企画する改憲を阻止するための大きな力になってほしいと思うのです。」として、「100%の投票率で改憲を阻止した上で、いずれは平和憲法保持を約束した新しい政党が生まれるきっかけになればよいと思います。」という将来像を明確にした上で、更にすごいのが「将来は安保条約も廃棄して米国に提供したすべての国内基地から米軍に撤退してもらい、軍備のない真の意味で独立した新日本を作ることを熱望します。私はその運動の最前線に立つ覚悟もできています。」との決意表明を96歳の大先輩がなさっていることに心から感動しました。特に護憲運動と安保条約破棄、そして非武装中立が分断されてきた歴史の中で、今こそこうした主張と運動が大きく広がるよう私も及ばずながら最前線に立つ覚悟を共有したいと思いました。

その9条世界会議には、5日の分科会に参加しました。前日は、152回目の署名提出行動その他があり、参加できなかったのですが、両日合せて皆さんもご存知のように2万人近い多くの人々が結集し、多くの感動と希望が生み出されたということです。私が残念だったのは、初日のコンサートに出演した「UA」を聞けなかったことでした。というのは、2日目の会場で、彼女の母親が沖縄人だったということを初めて知ったのです。ステージでも、そのことを話していたと言うことと東村高江にも行ったということを知ったからでした。

早速彼女のベストアルバムを買ってきて聴いています。ここにきて、沖縄の若者達が平和の使者として文化芸能面で大活躍していると思いませんか。

オキナワから平和を発信

琉球の昔からの伝統である武器に頼らない文化と経済生活、政治と宗教などが生み出した人の優しさと多様な交流が、今の時代に大きく花開いている気がします。あれほど戦争で痛めつけられても、米軍に占領支配されても「命どう宝、いちゃりばちょうでー」という琉球人魂は、その抑圧を撥ね退けて生きてきたということでしょう。

ということで、母の命日にも当たる15日から沖縄へ帰ります。平和行進、辺野古、高江、アイヌ民族との合同慰霊祭＝イチャルパ、独立への企画会議と勝手に呼んでいる交流会、最後の18日には、県民大会の参加の後で、シンポジウム「来たるべき自己決定権のために－沖縄・憲法・アジア」に参加します。内容は、1、反復帰の思想資源と琉球共和社会/国憲法草案の意義。2、沖縄・憲法・アジアーその政治展望ということで、そうそうたる論客が揃っているだけに楽しみなことです。

また、6月22日には、東京上野水上音楽堂で辺野古、高江に基地を作らせないためのすごいピースコンサートが沖縄の若者達を中心に企画されています。前売りチケットがなくなるほどのミュージシャンが勢ぞろいしています。乞うご期待!

(おおた たけじ)

飛行再開したF15戦闘機（嘉手納、08.01.15、リムピース提供）

●3月12日

嘉手納基地の有事を想定した即応訓練は12日午前、同基地所属のF15戦闘機や米軍クンサン基地（韓国）からF16戦闘機12機が飛来し実施された。このうち、F16一機が離陸後も前輪を収納するハッチが閉まらず、緊急着陸した。嘉手納町屋良では、午後には今年最高値となる104.5デシベルを記録した。多くの人が不快に感じる70デシベル以上の騒音も午後5時までに、138回発生。一日当たりの発生回数としては今月最多となった。その後、同基地南側滑走路の延長線上にある北谷町砂辺地区で午後2時36分に最大111.8デシベル（2メートル手前からの自動車のクラクションに相当）を計測したことがわかった。

●3月14日

普天間飛行場を離着陸するヘリコプターの騒音被害に悩む市民生活の実態を訴えようと、宜野湾市（伊波洋一市長）がビデオで証言を撮影し、ホームページで公開する事業を始めた。市の職員が証言者を直接取材し、国内外での要請活動の際に映像資料として活用する。

●3月15日

沖縄防衛局は15日、普天間飛行場移設に向けた環境影響評価（アセスメント）をめぐり、風向や風速など気象や潮風による塩害の調査を移設先である名護市のキャンプ・シュワブで実施、アセスの本調査に着手した。14日にアセス方法書が確定したことを受けたもの。

●3月17日

沖縄防衛局は17日、環境影響評価（アセスメント）調査のうち、海域で海藻草類やサンゴ類の生息状況などを調べる準備に入ったが、周辺海域でジュゴンが遊泳していることが確認され、調査は見送られた。

在日米軍再編に伴う、陸上自衛隊第1混成団によるキャンプ・ハンセンの共同使用が、正午ごろ始まった。陸自が在沖米軍専用施設で単独訓練を行うのは初めて。キャンプ・ハンセン第3ゲートでは午前7時半ごろから、トラックやジープなど約30台が施設内に入ったとみられる。訓練には一個中隊約150人が参加し、野営訓練やロープ降下訓練などを実施した。89式小銃や機関銃を装備しているが、今回は空砲を含め、射撃、爆破訓練は行わない方針だという。

●3月18日

沖縄防衛局は18日午前、海藻草類やサンゴ類の生息状況などの調査に着手し、初めて海域での環境影響評価（アセス）の作業に入った。汀間漁港で調査機材を積み込んだ調査船など約10隻は、8時半ごろから北側の嘉陽海域へ向かった。波はやや高かったが、リーフ内を中心にボートで調査員をえい航して海面から調査するマンタ法による生息調査のほか、ダイバーが水中に潜って写真撮影し、ボードに記録している様子などが確認された。一方、市民団体メンバーらは、阻止活動のため船2隻とゴムボート2隻を出した。しかし、海域の状況が悪いため、辺野古沖海上で警戒活動を続け、嘉陽沖までは船を出していない。

●3月19日

16日夜に沖縄市内の路上で米国人少年2人がタクシーから現金箱を盗んだ事件で、逮捕された少年たちはいじれも米兵の息子であることが判明した。かれらは、別のタクシー運転手への強盗致傷事件も犯行を自供している。また、この犯行には憲兵隊員も関与し、米軍の監視下におかれている。基地内の別の少年2人にも逮捕状が出た。

●3月23日

「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」（主催・同実行委員会）が23日、北谷町の北谷公園野球場前広場で開かれた。激しい雨の中、女性団体や教育関係、労組などの市民団体、地域住民ら6000人（主催者発表）が参加。続発する米兵犯罪や基地被害を厳しく批判し、日米地位協定の抜本改定などを求める大会決議を採択した。宮古島市、石垣市でも同時開催され、600人が怒りの声を上げた。

●3月24日

金武町議会は24日午前の3月定例会で、米軍がキャンプ・ハンセン「レンジ3」付近で予定している最大1200メートルの射程に対応する米陸軍特殊部隊（グリーンベレー）の小銃（ライフル）用射撃場建設に反対する抗議決議、意見書、要請決議案をそれぞれ全会一致で可決した。

●3月26日

金武町のキャンプ・ハンセン「レンジ4」付近で26日午後1時半ごろ、大規模な山火事が発生した。ピーク時には民間地まで推定約600メートル前後まで火の手が迫った。現場に近い伊芸区の住民らによると、ガラス窓を揺らすほどの爆発音の直後に火災が発生。同区では煙のにおいが立ち込め、灰が降るなどの被害が出ている。火災現場は、レンジ4の都市型戦闘訓練施設に近い山間部。米軍から沖縄防衛局に入った連絡では、発生現場は「レンジ3」の爆発物処理場（EOD1）付近だとしている。伊芸区によると、今年に入り、レンジ4付近で大きな爆発音を伴う火災が三回発生した。火災は午後11時54分に鎮火した。

●3月27日

午後1時59分ごろ、うるま市田場の県立沖縄高等養護学校（塩浜康男校長・124人）内に米軍関係とみら

れる車両が侵入し、校内で方向転換して引き返した。けが人や器物の破損はなかった。同校では昨年7月18日に米軍の装甲車が侵入、同8月には近隣の前原高校でも同様のトラブルが起こっている。

名護市のキャンプ・シュワブのレンジ10付近で27日午後零時半ごろ、山火事が発生し、同日午後2時52分に鎮火した。沖縄防衛局から電話連絡を受けた県基地対策課が発表した。米軍所属のヘリコプター1機が消火を行った。沖縄防衛局によると、火災原因は実弾射撃訓練によるもので、焼失面積は明らかになっていない。また、キャンプ・ハンセンで26日に発生した大規模な山火事の原因について、米軍から連絡を受けた沖縄防衛局は、廃弾処理によるものと発表した。

●4月3日

米軍のヘリコプターが、名護市辺野古の国立沖縄工業高等専門学校の上空付近で、機体を空中で静止させるホバーリング訓練を行っているのが午前、確認された。春休み期間で授業はなかったが、キャンプ・シュワブに隣接する同校は、これまで名護市などを通じ米軍に運用の改善を求めていた。

●4月8日

在沖米軍基地で行われている自衛隊の研修が、07年度は32回を数え、対前年度比で14回増加したことが、防衛省作成の資料で8日分かった。自衛隊が恒常的に米軍の技術を学んでいる実態が浮き彫りとなった。研修場所は、キャンプ・ハンセンや嘉手納基地など、在日米軍再編で日米共同使用の対象とされた基地が大半を占めている。防衛省は「米軍再編とは直接関係なく、通常の日米の相互協力の一環だ」と説明している。資料によると、07年度は航空自衛隊が22回、陸上自衛隊が9回、海上自衛隊が1回の研修をそれぞれ実施した。

●4月10日

沖縄市のタクシー乗務員への強盗致傷事件で、米軍の監視下にある嘉手納基地所属の憲兵隊員(22)が「(逃走に使った車の)運転をした」と犯行への関与を認める供述をしていることが10日、捜査関係者の話で分かった。憲兵隊員は犯行現場にいたことや、県警に逮捕されている米兵家族の少年四人らとともに事前に計画を立てていたことを認めているという。車は憲兵隊員の所有とされる。ただ、「自分は首謀者ではない」と、中心的な役割については否認を続けている。県警は米軍の協力を得て、任意で憲兵隊員から事情聴取を続けており、近く強盗致傷容疑で隊員を書類送検する方針。日本側は起訴後に米側から身柄の引き渡しを受ける見通し。憲兵隊員は軍の監視下にあり、基地外への外出などは禁止されているとされるが、一定の自由行動は認められているという。県警は少年らの供述などから、憲兵隊員が首謀者との見方を強めている。

米海兵隊のAV8ハリアー垂直離着陸攻撃機が10日午後2時45分ごろ、鳥島射爆撃場をターゲットにした訓練の際、提供水域から約2.7キロ離れた水域に演習弾(約227kg)2発を投下していたことが分かった。鳥島の射爆撃場をめぐっては、米海兵隊による劣化ウラン弾の誤射、漁船の操業妨害などが多発している。

●4月12日

日米の返還合意から12日で12年を迎える普天間飛行場で、宜野湾市が行う埋蔵文化財調査の試掘ポイントが計5100カ所に上り、そのうち約7割は未着手であることが分かった。今年3月までに試掘を終えた1700カ所からは82の埋蔵文化財が確認されており、専門家は「未着手部分からはさらに重要な文化財が発見される可能性がある」と指摘。市は「文化財の分布状況も分からないままでは青写真の線すら引けない」と跡地利用の遅延を懸念している。

●4月17日

北谷町美浜の衣料品店で13日、Tシャツなどを万引し店員に捕まった在沖米海兵隊員の未成年の息子2人を、通報で駆け付けた沖縄署員より先に米憲兵隊が拘束、基地内に連れ帰った問題で、憲兵隊が日常的に県警より先に基地内に連れ戻せと指導していたことが判明した。

●4月23日

嘉手納基地所属のF15戦闘機など計5機が23日未明、米本国へ向け同基地を離陸した。嘉手納町屋良で午前5時11分に、最高値96デシベル(騒々しい工場内に相当)の騒音を計測した。同基地からの未明離陸は昨年10月以来、約半年ぶり。

●5月2日

嘉手納基地所属のF15戦闘機など計11機が2日未明、同基地を離陸した。飛行ルートの真下に当たる北谷町砂辺では、午前5時17分に112.1デシベル(速報値)を計測した。4月23日にも未明離陸が行われた。

●5月3日

嘉手納基地所属のF15戦闘機など計11機が3日午前6時すぎ、米アラスカでの演習に参加するため同基地を離陸した。

●5月12日

仲井真弘多知事が米軍普天間飛行場の危険性除去策を検討する研究会設置を県の担当課に指示したことを受け、県返還問題対策課は12日、宜野湾市役所を訪れ、伊波洋一市長らからヒアリングを行った。危険性除去策について県がヒアリングを行うのは初めて。伊波市長は飛行場周辺地域の安全のため、ヘリコプターの進入経路と場周経路を定めた報告書が日米で合意された07年8月以降も、設定されたルートをはみ出して訓練を繰り返している現状を訴えた。

●5月14日

普天間飛行場の代替施設建設に伴い、環境影響評価(アセスメント)が行われている名護市辺野古で14日、基地建設に反対し作業船に抗議する市民団体のボートに、キャンプ・シュワブのビーチから出港した海上保安庁のボートが船に近づかないよう取り囲み警告をするなど、緊迫した状況が続いている。

POLITICAL CARTOONS

不条理の代名詞ガザ

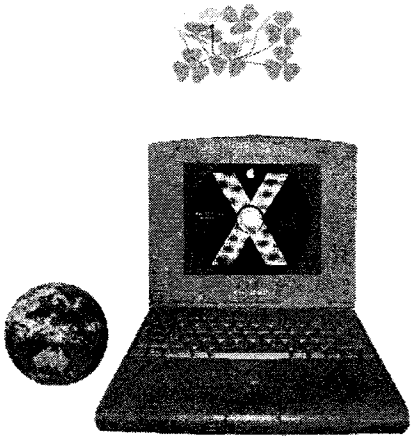
イスラエル建国六〇周年
が盛大に祝賀されるその一方で
パレスチナの怒りは…

「与える権利をもたぬ者が
受ける権利をもたぬ者にした約束」
バルフォア宣言の不条理を
世界はどう受け止めるのか
既成事実だけがどんどん拡大していく

編集室から

◎国家の安全保障より「人間の安全保障」をこそ、と「ビルマ」のサイクロン被害や中国・四川の地震が教えますが、この国、日本やいかに。また、オキナワやいかに。

◎５月、ヤマブキやクサノオウの黄色の花がいつしかマルバウツギやミズキの白い花に変わり、向こうの山からはホトトギスの甲高い鳴き声がひびき渡ってくるようになりました。土砂崩れや落石防止の金網の上に、ハンショウヅルやスイカズラがひっそりと咲いていました。



会計報告（08.03.27 ～ 08.05.18）

【収　入】		
1　先月からの繰越		235,209
2　当期の収入		12,000
(1)会費収入		
①維持団体	0	
②維持個人	0	
③参加団体	0	
④参加個人	0	
⑤通信会員	12,000	
(2)カンパ収入	0	
(3)運動収入	0	
(4)預金利子・資料収入	0	
【支　出】		
3　当期の支出		32,438
(1)郵送費	28,128	
(2)文具・備品	2,610	
(3)振込手数料等	200	
(4)分担金	0	
(5)ロッカー代	0	
(6)雑費・備品	1,500	
【残　高】		
4　次月への繰越		214,771

月刊「キャッチピース」　発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース　編集●キャッチピース編集委員会
連絡先●232-0065横浜市港北区高田東3-38-15田巻一彦方 電話・fax●045-531-1341／e-Mail: QZT04441@nifty.com
郵便振替口座● 00160-7-136148「キャッチピース」　定価● 100円（通信会員年間 3,000円）